

《2015年10月 月例会報告》

大学の授業を通じた体育・スポーツ分野における国際協力 -カンボジア王国におけるスポーツ指導・運動会・体育の実践-

山平芳美 (国際武道大学 特任助教)

【日 時】2015年10月23日(金) 19:00~21:00 (その後「景宜軒」~23:20頃)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】大学の授業を通じた体育・スポーツ分野における国際協力

-カンボジア王国におけるスポーツ指導・運動会・体育の実践-

【演 者】山平芳美 (国際武道大学 特任助教)

【コーディネーター】岸卓巨 (スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局) & 嶋崎雅規 (国際武道大学)

【参加者 (会員) 6名】

安藤裕一 (筑波大学ハンドボール部OB)、岸卓巨 (スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局)、小池靖 (サッカースポーツ少年団)、小林俊文 (群馬県立渋川青翠高校)、嶋崎雅規 (国際武道大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)

【参加者 (未会員) 6名】安藤江美、今野涼太 (国際武道大学)、篠原翼 (明治大学)、遠山諒 (国際基督教大学3年)、松井完太郎 (国際武道大学)、山平芳美 (国際武道大学)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません (ご本人の了解が得られた範囲で公開しています)

【報告書作成者】山平芳美

〈目次〉

<参加者自己紹介>

1. スポーツ・フォー・トゥモローの概要
2. カンボジアにおける体育・スポーツ支援活動の概要
3. カンボジアにおけるスポーツ支援活動
4. スポーツ分野の概要と成果
5. カンボジアで運動会を開催するようになった背景
6. 運動会及び体育分野の概要と成果

<質疑・応答・感想>

1. スポーツ・フォー・トゥモローの概要

岸： スポーツ・フォー・トゥモロー（以下 SFT）という国の取り組みについて説明します。映像をご覧頂いた後に、詳細な説明を行います。【映像】

岸： 映像で SFT コンソーシアムについてご覧頂きました。

今までスポーツを通じた国際貢献を実施されていた団体がたくさん存在しております。そうした団体をネットワーク化して、お互いの理想図を有効活用していくグループをつくっています。赤いリーフレット裏側に団体名が記載されております。各々得意な分野が異なりますが、各々の得意な分野を活かしながら、スポーツを通じた国際貢献を日本全体が一丸となって、オールジャパンで進めています。

その中に認定事業という枠組みがあります。SFTは100カ国1,000万人にスポーツ体験を提供するという大きな数字目標を掲げて行っている事業で、SFTC 会員団体と一緒に取り組まなければ到底達成できません。そこで、会員団体が実施する事業を、SFTの運営委員会で認定させて頂いて、同じSFTという旗のもとで実施していこうと始まったのが、認定事業です。現在50事業ほどの認定事業が始まっており、本日まで発表頂く国際武道大学のカンボジアにおける運動会運営も認定事業の一つになっております。

会員93団体のうち、まだ実質的に動いていない団体もいらっしゃいますが、各国の支援要請に対してSFTコンソーシアムで情報を共有、検討し、団体の活動に繋げる動きも出ています。例えば、ネパール水泳連盟から支援の要請やカンボジアからの要請を、そのフィールドを得意とされている団体に繋ぐ動きが始まっています。

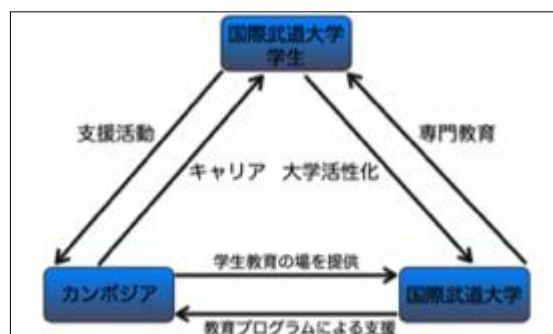
嶋崎： それでは山平さんにご発表頂きたいと思います。よろしく申し上げます。

2. カンボジアにおける体育・スポーツ支援活動の概要

このような機会を設けて頂きましてありがとうございます。国際武道大学の山平と申します。よろしく申し上げます。

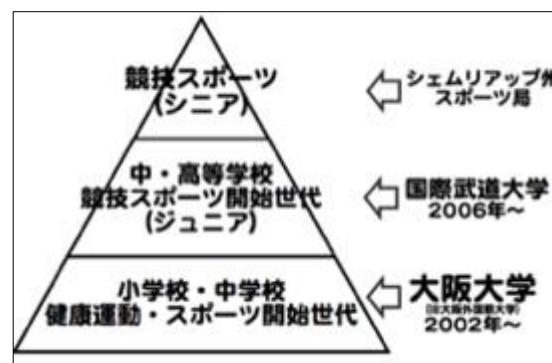
国際武道大学では毎年1回、学生がカンボジアに渡航しています。本日参加している松井・山平、もう1名木村の3名で授業を担当しています。2006年当時の映像がございますので、ご覧下さい。【映像】

ご覧頂いた活動は、学生がSports Project in Cambodiaと銘打って、2006年から活動が始まりました。今年度で11年目の活動になりますが、学生・大学・カンボジアの三者の関係が支援の継続のために重要であると考えてい



ます。三者の互恵関係を示した図を御覧ください。大学は学生を教育し、学生は学んだことを通じてカンボジアを支援し、カンボジアは大学に学生に研修の場を提供します。逆に見ると、学生は大学を活性化し、大学は教育プログラムでカンボジアを支援し、カンボジアは学生に「カンボジアの小学校で支援活動を実施した」というキャリアを提供してくれるのです。この三者の互恵的関係の明確化が、11年という長期にわたる継続をもたらしているのではないかと考えています。

カンボジアでの活動の契機を下さったのは大阪大学（旧：大阪外国語大学）でした。大阪大学はシェムリアップ州において小・中学校世代を対象に2002年から支援を開始したのです。翌年には、中・高生を対象にスポーツ指導の依頼が本学にありました。学生は体育・スポーツ指導法を専門的に学んでいます。専門性を活かして現地中高生を対象としたスポーツ指導を実施することになりました。



学生は主に2月下旬から3月上旬にかけてカンボジアに渡航します。スポーツ指導はシェムリアップ州を中心に実施してきました。学生によるスポーツ指導は高校6校、中学校2校となっています。2009年から小学校で実施している運動会も学生が行っています。カンボジアの体育・スポーツ支援活動に携わった本学学生は毎年平均10名程度、のべ200名程度の参加者数となっています。

3. カンボジアにおけるスポーツ支援活動

本学のスポーツ支援活動のカウンターパートナーとなって下さったのが OUK Sarath 氏です。元カンボジア代表 GK で、日本の文部科学省にあたる州の教育青年・スポーツ省のスポーツ局長を務められ、現在は退職されておられます。

OUK 氏、大阪大学（旧：大阪外国語大学）を通してスポーツ指導の打診があり、大学教育プログラムとして取り組んでいこうということになりました。当時の学生達と本日参加している松井で、決めた目標があります。「2048年 インドニューデリー・オリンピック・パラリンピックに出場するカンボジア代表選手のテレビ中継を見ながら、『じいちゃんはな、ばあちゃんはな、カンボジア代表選手の礎を築く手伝いをしたんだ』と膝の上にのせた孫に話そう」という物語です。この目標は今も変わりません。

4. スポーツ分野の概要と成果

カンボジアのスポーツ支援活動は大学教育プログラム（授業）です。指導に携わる学生は、半年間の準備を経て渡航します。学生はカンボジアの高校で指導をするために、指導案を作成します。指導案作成の為に手書きで案を出し合い、最終的には Word や Excel で仕上げます。

指導案が完成したら、大学施設利用手続きを申請し、体育館やグラウンドを借ります。実際に指導が

できるのか、指導案通りに指導が進むのか、指導の練習を繰り返します。サッカー、バスケットボール、バレーボールそれぞれ指導者側とカンボジアの生徒役となり、徹底的に指導の練習をして渡航します。

カンボジアの多くの学校には用具・道具が不足しています。例えば、カンボジアの生徒の多くはスポーツの練習に、裸足やサンダルで参加します。そこで日本の中学校3年生や高校3年生にとって卒業時に不要となる体育館シューズなどを洗った上で提供してもらい、我々が現地に運び、カンボジアの高校生たちの練習時に使用しています。

彼らは裸足で鋭いシュートも蹴ることができますが、競技ルール上シューズやスパイクを履いてないと試合に出場することができない場合もあります。そうした環境（シューズ・スパイクを履く）に少しでも近づけ、練習にのぞんでもらいたいという思いが学生にあります。

支援して終えるのではなく、「御礼」まで学生には大切にさせています。学生は日本に帰国後直ちに母校へ出向き、色紙と感謝の言葉を協力して下さった先生方や生徒に届けています。

カンボジアのスポーツ関係者より、「スポーツ関係の本や教材がない。また指導 DVD のようなものもないので、教材を作って欲しい。」という要望がありました。そこで、スポーツ指導に参加する学生が、①教材の企画検討②絵コンテ作成③Word・Excel で編集④印刷製本⑤カンボジアで練習後生徒に配付の取り組みも行っています。

学生は指導書作成以外にも、指導 DVD の作成も行いました。指導 DVD はミーティングや雨期の練習ができない時期などに活用していると、現地から報告を受けています。【映像】

学生は教材作成、DVD 作成支援以外に、スポンサー獲得も行います。学生自身で協力して下さるスポンサー企業を探し、依頼をします。これまで、モルテン、ナイキジャパン、大塚製薬（ポカリスエット）、(株)吉野屋、Cambodian Tiger FC 様の協力を得ることができました。例えば、2013年11月にオープンしたシェムリアップ州吉野屋は、プラサットバコン高校とサムデックアウ高校まで牛丼を届けて下さり、練習後にカンボジアの生徒と本学学生が牛丼を一緒に食べるという交流を持つことができました。

今年は Cambodian Tiger FC にスポンサーを依頼しました。このチーム、実は2014年12月末突如オーナー企業から解散を言い渡されます。そこで元オーナー企業の社員でクラブスタッフでもあった1人の男性が立ち上がり、「これまで頑張ってきた選手、家族、スタッフはどうなってしまうんだ」と自分の全財産を使って解散危機を食い止めます。しかし全財産は500万円。それだけではチームはもって2ヶ月。そこで元社員は新しいオーナー探しを始めました。2015年1月上旬に現オーナーが情報を Facebook でキャッチし、新オーナーとなり Cambodian Tiger FC が誕生しました。新オーナー企業のビジョンは「2035年までにメッシ超え、バルサ超え」です。今このカンボジアのチームを運営できなければ、2035年までにメッシを超えるようなアジア人選手の輩出、バルサを超えるようなアジアのチームを持つことはできないと、買収を決断されたそうです。

Cambodian Tiger FC は「1CHILD 1BALL (以下 1C1B)」カンボジアで子ども1人ひとりにボールを

1つずつ配るプロジェクトに取り組まれています。1C1Bに本学も協力をしました。クラブに対する個人からの支援の一部をカンボジアに還元するものです。1口3,000円の支援に対して1つボールを配る活動をされています。【映像】

学生は、指導案作成やリハーサルを繰り返し、スポンサーを獲得するなど準備を経て、カンボジアに渡航します。カンボジアでは、サッカー、バスケットボール、バレーボールのスポーツ指導を行います。

2～3日高校で練習をした後、2つの高校の対抗戦を学生が運営します。審判も学生が行います。学生は、カンボジア独特の環境にあわせ、観客の管理もしながら試合運営を心掛けなければなりません。

学生が取り組んできたスポーツ分野の成果の一つが、シムリアップ州サムデックアウ高校出身のティアです。高校を卒業して、ホテルスタッフとして働きながら、バレーボールのコーチとして指導している姿がFacebookを通じて確認されました。学生の指導から学んだことを、カンボジアで実践してくれている良い事例となっています。

5. カンボジアで運動会を開催するようになった背景

大学教育プログラム初年度のリーダーを務め、卒業後青年海外協力隊員としてカンボジアで体育教員を務めた学生……私ですが、当時、大学のゼミ担当教員に青年海外協力隊合格を報告すると、「お前はカンボジアの体育の母になれるぞ。」煽られました。私も、その気になって渡航しました。

カンボジアの体育をなんとか変えたいと2年間取り組みましたが、小学校教員養成学校で授業をしていると将来小学校の教員を志望している学生がアイスを食べながら授業に参加するような状況でした。悔しい日々もありましたが、付属小学校で体育の授業をお手伝いしたことを契機に小学校で運動会を開催することになりました。2009年2月、カンボジアに来た本学の先輩達に、小学校で運動会の運営を補助してもらいました。その運動会開催後、小学校5年生が私のところに駆け寄って来て「今日の運動会はすごく楽しかった。だからまたやってね。」と言われ報われた気がしました。

日本では、体育授業の成果として運動会という傾向にありますが、カンボジアの場合、運動会の開催が「運動ってこんなに楽しいんだ。仲間と協力して勝って嬉しいこともあるし、負けて悔しいこともあるからまた頑張ろう」という気にさせ、運動会が体育授業の契機となるというのが、2年間青年海外協力隊として活動した気付きです。本学の大学教育プログラム（授業）と一緒に担当している木村の協力もあり、カンボジアの小学校で運動会の開催を、大学教育プログラムでも行うことになりました。

	派遣国	職種	活動状況
1	カンボジア	体育	帰国済
2	ヨルダン	体育	帰国済
3	ボリビア	体育	帰国済
4	モンゴル	体育	帰国済
5	エチオピア	体育	帰国済
6	モンゴル	体育	来春

6. 運動会及び体育分野の概要と成果

日本の学生たちは子供の頃から運動会を何度も経験していますが、運営するのは初めての経験になります。開催のための企画書及び指導案を検討し、それに基づいた運動会のリハーサルを何度も繰り返して渡航します。

カンボジアの小学校現場は教材が不足しているので、学生は「36の動き」を軸にした小学校体育実技指導書を2014年度から作成しています。学生が、体育実技指導書の①企画・検討②撮影・編集③印刷・製本し、④カンボジアの小学校教員養成学校の学生や小学校教員に配付・説明を行いました。

現在、途上国といえどもカンボジアの学生の多くがスマートフォンを持っています。すなわち、彼らはスマートフォンで情報を収集し、その情報を手元に残しておくことができるのです。そこで、YouTube指導書の内容の一部をアップロードしています。我々がカンボジアから帰国後も、YouTubeを通じて指導法を確認できるようにしました。YouTubeはカンボジアからのアクセスや検索を通じた視聴が確認されています。【映像】

YouTube アドレス : <https://www.youtube.com/channel/UCU5PmH1CpCRT31BGWmRWvVA>

実際に小学校教員養成学校の学生に対して本学学生が用具に頼らない体育実技指導を体験する機会を設けました。本学学生が帰国後も、YouTubeで小学校教員養成学校の学生が確認できるシステムづくりを行っています。

YouTubeにオープン教材をアップロードする以外にも、学生はカンボジアの活動報告をホームページを通して行っています。ホームページからは運動会の指導案や資料を無料でダウンロードできるようなシステムにしています。Facebookも学生を中心に管理しています。カンボジアから最も閲覧しているWebサイトはFacebookです。今年からクメール語と英語のFacebookページを作成し、より多く体育・スポーツの情報を共有できるようにしています。【映像】

HP アドレス : <http://sports-project-cambodia2014.jimdo.com>

Facebook ページ : [Sports Project in Cambodia](#)

学生達は運動会開催終了後、カンボジアの児童に折り紙メダルを授与します。毎年500個以上という膨大な数になります。そのメダル作成は、過去にカンボジアのスポーツ指導に参加した卒業生が、現在は小学校教員となって担任するクラスの児童たちと一緒に作成し、後輩のサポートをしてくれています。日本の児童が折り紙メダルを作成し、カンボジアに学生が持参する。日本の児童による国際協力にもつながっています。学生は、帰国後小学校に訪問して報告とお礼を協力してくれた小学生に伝えています。

これまで実施してきた運動会の成果の一つは現地の体育教員の変化です。私が青年海外協力隊員として活動していた頃、何となく脇でみていたカウンターパートナー（SPC2015ムービーで最後えんじのTシャツを着て得点を発表する教員）が、今年は、以前から比べると見違える程、完璧に最初から最後まで

で運動会の指揮をしていました。

今年の運動会は、日本の学生とカンボジアの学生の共同運営にもなりました。私が青年海外協力隊時代に初めて実施した運動会では、小学校教員養成学校の学生は校庭の外から眺めていました。それが5年後の2014年になると、運動会を開催している付近でメモを取っています。2015年は、将来小学校の教員となるカンボジアの学生（オレンジのポロシャツ）と、本学学生（えんじ色又は青色のTシャツ）の共同で運動会を運営するまでにこぎつけました。

岸さんにもご紹介頂きましたが、学生が取り組んでいる運動会の開催とスポーツ支援活動は、SFT認定事業として活動をさせて頂いています。最後に今年の3月に実施したカンボジアでの映像をご覧ください。えんじ色のシャツを着て最後に得点を発表するのがカンボジアの体育教員ブッタ先生、オレンジ色のポロシャツが将来カンボジアの小学校教員となるカンボジアの学生、エンジ色・青色のTシャツが本学学生です。【映像】

SPC2015 ムービー：<https://www.youtube.com/watch?v=3HZi2BNE2c>

以上です。ありがとうございました。

<質疑・応答>

嶋崎： ありがとうございました。松井先生何か補足はございますか。

松井： 発表した山平先生が、学部2年生の時に「海外交流」という授業でスウェーデンに行きました。先進国だけでなく、途上国でも海外で活動する授業を実施したいと考え、一緒にスウェーデンへ行った、山平と高校時代ニュージーランドに留学していた学生の2人でカンボジアの調査させ、その後、カンボジアのスポーツ支援活動の試験的实施を数年行いました。本日の発表内容のカンボジアでのスポーツ支援活動をつくりあげたのは、この頃の学生達です。

重要なことは互惠関係を意識することだと考えています。カンボジアに上から何かしてあげるのではなく互恵的な関係を築くということです。そう考えたのは、先行したベトナムでの経験があったからです。1999年からベトナムで支援を始めた時は3年しか持ちませんでした。双方が互いに疲弊してしまうということです。お互いにきちんとメリットを出すことが重要だと考えています。学生・カンボジア・大学の三者が対等な互惠関係です。支援活動においてささやかな活動も「カンボジアのため」になっていると思えてしまいます。学生達も「カンボジアのために」と漠然と言っていると、努力を怠り、どんどん支援する内容が小さくなる印象を持ったのです。「カンボジアはあなた達のために時間や場所を提供してくれている。教育実習と同様で、カンボジアが場所と時間を提供してくれているのだから、ベストな物を出さなければ申し訳ない。」という物語の方が学生のモチベーションを高め、追い込みます。学生・カンボジア・大学の三者の物語として、今のところ上手くいっていると思います。

中塚： もう一度確認ですが、そもそも始まりについて、松井先生がスウェーデンに行かれるようになったあたりにさかのぼってお聞かせ下さい。

松井： 2001年にカリキュラム改革があり、武道学科・体育学科の2学科体制から、スポーツトレーナー学科と国際スポーツ文化学科が加わりました。私は国際スポーツ文化学科の担当になり、学生に海外で研修させる授業を導入しました。空手道部をベトナムに連れて行った時に学生の満足度も高かったし、私自身も大きな教育効果を感じた経験があったからです。最初はスウェーデン、そしてカンボジアの授業に繋がっています。外国に渡航する際、学生に英語でメールも作成させますし、現地のバスの手配もさせます。学生にそうした実体験をさせるプログラムを授業の中に盛り込むことが重要だと考えています。

カンボジアでの活動を通じた授業を一緒に担当している木村は、青年海外協力隊でアフリカに5年程行っていました。ジンバブエで木村と青年海外協力隊で一緒だった大阪大学（旧：大阪外国語大学）教員の紹介でカンボジアとの関係がはじまりました。青年海外協力隊のネットワークもあって、随分きっかけを頂きました。学生が管理しているHPにも、大阪大学（大阪外国語大学）さんとの関係について、掲載をしています。

当初、我々のイメージとしてはカンボジアの早慶戦もしくは、附属学習院戦でした。定期的にやれるといいなと考えていました。我々は宿泊している市街地よりあまり遠方へは行かないようにしています。事故の危険が高まるを恐れ、それを回避したためです。

嶋崎： カンボジアの支援は大阪大学の次に入られたということですね。青年海外協力隊のつながりがあったのは大きいと感じました。他の方、何か質問はないでしょうか。

篠原： このスポーツ事業を行われる上で最大の問題点があると思います。カンボジアに行かれて、例えば大きなトラブルがあった時に、どういう対処をされているのか。日本国内でこの事業を行う上で、どういう問題点が出てくるのかについてです。

また、民間企業が支援をされているということなのですが、支援となるとお金ですよね。その前に岸さんが説明された国費で、国が認定してスポーツを支援していくというカタチなので、国費としてその事業に対して金銭的な支援がなされているのか、もし金銭的な支援がないとするならば、本当に学生が払うお金で全て賄っているのか疑問に思いました。

山平： 一つ目の問題点については、カンボジアでの大きな問題としては、渡航する学生が体調を崩し入院したりすることもあります。入院した場合、事前に海外渡航保険に全員入っていますのでキャッシュレスでの対応ができています。入院した場合、授業担当教員から、保護者へ連絡を入れ、また本人からも連絡を入れ、現状の説明を直ちに報告するようにしています。また快復後も、保護者へ連絡を入れる対応をしています。

日本の問題としては、このプロジェクトは本来サッカー、バスケットボール、バレーボールを専門としてその指導ができる学生が集まることを前提に始まりましたが、ここ数年はサッカー、バスケットボール、バレーボールを専門としないが、将来保健体育教員を目指す学生が参加する傾向にあります。そこで、運動会を軸とした支援へ参加する学生に合わせ大学教育プログラム内容に変化をつけています。参加する学生のタイプが変わってきた点が、以前から比べると変化した部分だと感じています。いかがでしょうか、松井先生。

松井： まずは、お金のことです。学生は学生のメリットになるので、毎回15万円～20万円が自己負担となります。

最初から相当覚悟して行きました。木村も青年海外協力隊員出身ですので、最悪の事態を想定し、どう対処したらいいのだろうか、とシミュレーションしていました。当時は、アンコールワット観光で、遺跡から足を滑らせてしまって、頭部を強打したらヘリコプターでタイに搬送することまで考えていました。ヘリコプターを手配してくれる店で確認もしましたが、国境を越えられないことが判明したり、どこまでリスクマネジメントするかということのを常々考えています。

実際に、他大学であった事故についても聞いて確認しました。そうした事例を参考に、海外渡航保険にしても、救護費用に対する保障が重要で、200万円もしくは無制限にし、保護者が現地にかけることができる費用が出るところまで考えます。

安全に対する意識は高いつもりですが、それでも私はスウェーデンで1回事故を起こしています。学生ではなく外部の方ですが、スノーモービルには乗り慣れていると言う本人の言葉を信頼したら、操作に慣れておらず、スノーモービルが暴走して、木に激突した事故でした。たまたまた、怪我もなくラッキーでしたが、事故は気が緩んだときに起きるということが身にしみました。

また、引率する教員が判断に迷ったことや、教員同士で意見が分かれたことは、あとで学生にも開示するようにしています。学生の多くは教員となって引率する立場になるからです。

以前は、ある学生の熱が下がらず、シハヌークビルからプノンペンに移動させなければならぬ事態になりました。学生とは、教員同士が話した内容、決めた過程も共有しました。学生が病気で倒れても、その学生が倒れているからといって活動停止とすると、その学生にもプレッシャーがかかります。学生には現状と事情を説明し、臨機応変にプログラムを遂行するようにしています。また、病気の場合、学生から保護者に連絡をさせます。保護者との信頼関係をつくるように意識しています。

保険に関連して、カンボジアの児童・生徒が倒れた時の対応が問題です。学生の事故は海外渡航保険に入っているので問題ありませんが、カンボジアの児童・生徒を我々が行っているような病院に連れて行くと10万円以上かかる場合もあります。救急車呼ぶだけで2万～3万円かかります。助けてあげたい気持はありますが、この活動自体の継続にも影響します。そこでカンボジアの小学校や高校の校長先生と協定を結び、学校側に対応してもらうようにしています。もしそういう状況になった時に、カンボジアの問題はカンボジアがやると学生に伝えています。ある

大学の事例では、あまり食事をとれていない児童が倒れてしまい、点滴のみで10万円以上の支払いに追われたとも聞きました。

スポンサーについては、スポンサーに責任がでないように対応しています。お金はスポンサーから頂いていません。物を提供して頂いています。物を提供してもらって充分なんです。NIKEのスポンサーをもらっているだけで、学生は「やった俺達はNIKEがスポンサーだよ。」になります。我々の視点は学生側にあって、学生が自信を持ってくれればいいんです。ある学生が先生、「NIKEとスポンサー交渉していいですか？」と言ってきました。無理だろうなと思いながら「NIKE難しいと思うけど、やっごらん。」と言っていました。暫くすると私の研究室に段ボールが沢山送られてきてきました。それをやったのが今日の発表者山平先生です。教員の思い込みを越えた学生の話をする、次の学生も「じゃあここやってみます。」とチャレンジするようになるわけです。

我々が事故起こすことによって支援企業に迷惑がかからないように配慮しています。また、活動への支援金を企業にお願いしたことはありません。SFTからも一切頂いていません。学生にとって国費は必要ありません。我々は2020年以降もきちんと継続していきたいと考えています。補助金がなくなったら終わる活動はしたくないという想いがあります。

嶋崎： やはりリスクマネジメントっていう視点はこういう活動では大きいですね。私も話を聞いていて気になったのが、指導をしていて指導されている側が事故にあった場合、支援に入っている側の責任はどうなるのかというので、松井先生の方からは協定を結んでいるというのを聞いてびっくりしました。我々は常にスポーツ指導をしている場合には、自分の現場で事故が起こった時に自分はどの責任をとるか常に考えなければならないのですごく重要だと思いました。

現地で日本の学生が病気になったとき、この辺の対応を専門分野でもある安藤さんに、どういう対応が良いのか、アドバイス頂ければと思います。

安藤(裕)： まずは、海外渡航保険に加入して頂く事です。具合が悪ければ、早めはやめに診てもらおう。プノンペンもシェムリアップも医療技術はそう変わらないと思います。重症な場合はバンコクに運ぶことになると思います。重症だから早くバンコクに運んで欲しいと電話上で保険会社に電話で伝える対応なども重要です。受け身にならず、現場の声を保険会社にしっかり伝えることです。そうすることで早めの対応ができるのではないかと思います。

嶋崎： 早めの対応が大切だということですね。実際に指導を受けている現地の児童・生徒が病気の時は、現地の先生が対応しているのですか。

松井： 今のところそういったことはありません。

嶋崎： 熱中症ですが、どうでしょうか。

松井： 現地の児童・生徒の熱中症対策もですが、現地の気候に慣れていない学生たちの体調の方が心配かもしれません。給水には衛生上の安全を配慮してペットボトルに入ったミネラルウォーターを使います。学生が給水するときにカンボジアの児童・生徒も一緒に給水します。10分～15分に1回、頻繁にやっています。

嶋崎： 蚊の対策というのは、気をつけた方がいいのでしょうか。どうでしょうか安藤さん。

安藤(裕)： デング熱・マラリアは蚊の対策です。A型肝炎とか、念を入れるとB型肝炎、破傷風、狂犬病の予防接種をやっておいた方がいいかもしれません。20代学生であれば小さい頃の免疫があるので多少大丈夫かもしれません。狂犬病もしても、放し飼いの犬がカンボジアにいますよね。

松井： 初期の頃から、一晩寝れば治るという対応でなく、とにかく現地の病院に行っています。

安藤(裕)： 松井先生が話されていましたが、学生に事前にどのようなことを伝えた上で臨まれているのか、教えて頂きたいのですが。

松井： 学生に対しては安全管理を徹底してやっています。あらゆる事態を想定し、考えさせ、行動を確認する作業を渡航直前に徹底します。例えば、教員が事故にあって入院し動けなくなっても、学生達は当初の予定通り帰国する約束をします。格安チケットを買っているので日程の変更ができません。「教員には救護費用で大学から迎えが来るから帰りなさい。」という指導です。現地で学生が判断できなくなるような状況を恐れるからです。

もし、出発時成田に遅れたら…、そういった、限界事例のときの行動に関する事前決定をしています。学生が体調不良になって病院へ行くときには親に連絡することもやっています。現地で使える携帯電話を購入し、入院したら学生にも渡します。保護者にも外国への電話の仕方を事前に伝えていきます。

病気予防については神経質ほど注意しています。街中の氷やフルーツは食べないなど、食事の指導もおこなっています。慣れた頃が一番危ないので、初期の頃は食事制限などもしていました。

我々が渡航するところは治安がいい場所ですが、外出時の注意も徹底します。「反対側から車がくる。」「ここの遺跡から落ちないように。」「トンレサップ湖は塩水ではないから沈む。」など、常に様々な事故を想定して学生同士で注意確認させます。

事前に予定表を見ながら、順番にあらゆる想定をして確認をする。そういう安全管理をやって

きたつもりです。

嶋崎： 渡航前の準備や現地のことについてなど、気になることも多いですが、中身のスポーツ指導や運動会について質問はありますか。

中塚： 見ていて、学生さんにとってすごくいいなと思います。私が勤務する学校には筑波大生が教育実習生として毎年たくさん来ます。競技成績優秀で推薦入試で大学に入学し、それぞれの部活動では力を発揮できる学生達が多いのですが、机上での指導案書きに追われて実際のシミュレーションを怠ってしまう学生さんがいます。指導案を書いた上で、ちゃんと事前に体育館で練習したりシミュレーションして、そこまでやって渡航するこのプログラムはすごくいいと思います。

また、逆にそこまでやる時間的な余裕といますか、余裕がないなかで皆さん時間をつくって指導されているかもしれません。素晴らしいプログラムだと思って拝見しておりました。

嶋崎： 比較的朝の時間を活用されていますよね。

山平： 今年からミーティングの時間を朝に変えました。

嶋崎： 本学の場合は授業がつまっています。放課後は各クラブの活動があります。そうすると一同に会することが難しくなるので、朝の時間を活用するのは良いと思います。ミーティングも朝の時間にやったりするので、有効な時間の使い方だなと思います。運動施設も朝だと空いています。放課後は各クラブが活用しているので、活用しやすいですね。そういう時間帯にやる工夫がいいですね。これは本学のみならず有効な手法の一つかと思います。

中塚： これはこの授業を選択した学生のためのプログラムですよ。

山平： そうですね。授業を選択した学生以外にも、渡航を希望する学生がいましたら、保護者の許可を得て、授業を履修していない学生も渡航することが可能です。この授業は「スポーツデザイン実習」といいますが、報告書でレポートをしっかりと書いて提出をすることになります。授業履修は柔軟に対応しています。

小林： カンボジアで、支援に行かれている学校の授業形態はどのようになっていますか。

山平： 2部制の学校です。スポーツ指導に入っていた高校は2部制ですし、小学校も午前・午後とわかれています。運動会を実施するときは、午前に登校する児童を対象とした運動会と午後に登校する児童を対象とした運動会を実施しています。

スポーツ指導の場合は、各種目選抜されたメンバーですので、学校に許可を取って、午前2時間・午後2時間の練習に参加してもらっています。

小林： 私が行っている地域は、2部制で電気も水道も通ってないようなところですので、2部制で体育の授業はあるのですが、体育の先生がいないようです。

山平： そうですね。体育の授業は教育省の確認があるので時間割には入っているとは思いますが、実際は体育の授業はなく、他の教科になってしまっているのは、他の地域も変わらない部分だと思います。

嶋崎： 小林先生が行かれています地域の話は、是非お聞かせください。

小林： 私が行っている地域は、電気も水道もないようなところですよ。ご飯も行った地域の通訳さんの知り合いのところまで頂きます。瓶から水をくんで、それで調理をして出してもらっています。完全な2部制で、朝の7時から11時まで、昼は12時から16時までの授業になっています。中流階級の農村部ですから、1ヶ月1万円弱くらいで家族が生活しているようなところですよ。ユニフォームも何もないようなところですよ。全て何もありません。

嶋崎： そこにボールだけ持って行き、指導されているのですよね。指導対象はどのようになっていますか。

小林： ボールとゴールとマーカーを持って行きます。指導対象は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の部活、スラム街のサッカーチームと孤児院です。

嶋崎： 年1回行かれていますか、どれくらいの期間行かれていますか。また、指導対象は何年生ですか？

小林： 10日間です。12月の乾期の時期です。雨期の時期はメコン川の水位が上がり7m程水位があがるので指導が難しいですね。指導対象は、幼稚園から小学校、中学校、高校と学校単位で行っています。1教室多い時は150名を20教室くらい開催するので、1回渡航すると2,000人位がのべ人数です。

中塚： 小林さん、今日は写真のデータはお持ちでないですか。

小林： SDカードがあります。少しご覧になりますか。

中塚： 回覧できるようにしたらお願いします。以前小林さんから写真を色々見せて頂いて、こんなところに行ってらっしゃったんだなど。衝撃的だったのが、指導していたグラウンドから白いものが沢山出てきたという話です。もしよければその話をお願いします。

小林： はい。ポル・ポトの大虐殺は農村部でしたし、埋める土地がありませんでした。校長先生が「この白いのわかりますか。」とたずねてこられたので、「何ですか？」と聞いたら「歯」だとおっしゃるのです。学校の土地の下に200体位遺体が埋められ、その上に学校が建っている状況でした。そういう場所に学校が建っています。だから校庭に歯が落ちていたりするんですね。

松井： プノンペン観光地にもなっているキリングフィールドには、遺骨が集められた大きな塔が立っているのです。すべての遺骨は回収されたものと私は思い込んでいました。しかし、乾期になると、観光客が歩いて小道の至るところから骨が露出していますよね。はじめは気づきませんでした。TukTukの運転手に「あなたの足下、それ人骨ですよ。」言われて気がつきました。

小林： キリングフィールドのところはすごいですよね。穴に遺体を放り込んであるので、人骨がまだたくさんでています。殺害の仕方が酷く、赤ちゃんが100数体放り込まれているところは、兵士達が母親から赤ちゃんを取り上げて、頭を大きな木にぶつけて殺害して放り込んであります。

松井： ポル・ポト時代は、高校が収容所になり（トゥールスレン博物館）、体育用具が拷問の道具になりました。体育大生としては悔しい事実を学生には渡航前に教えます。カンボジアの人たちはいい人達なんですけどね。どうしてそんなことしてしまったのかなという感じです。

小池： 学生さんにその頃の時代の話がされるのですか。

松井： します。学生に「キリングフィールド」の映画を見せます。ポル・ポトの志は熱いものがあったんだけど、何故そうってしまったのかという部分を話たりします。小林さんが行かれています地域の場所の地名を教えてくださいませんか。

小林： プレイヴェン州です。KEAF-JAPANの活動で支援に入っています。

嶋崎： 私の先輩に、誰かサッカー指導できる人はいないかと、そこで小林さんを紹介しました。

松井： 地雷は大丈夫ですか。以前学生は空き地にボールを取りに行くことにも怯えていました。

小林： この辺りは大丈夫です。

嶋崎： カンボジアも地域によっては事情も違うようですね。

小林先生の写真をプロジェクターに投影開始

小林： これはカンボジアの高校の部活動の写真です。このグラウンドの下は骨で、200体程死体が埋まっていたところでした。これは、また違う高校のクラブ活動です。

松井： ボールはいくつぐらい持っていますか。靴はどうしていますか。

小林： ボールは100個位持っています。都市部の学校以外は、スパイクは履いていません。

松井： 初期の頃、裸足は痛そうだなと思っていましたが、裸足でも素晴らしいプレーをしますよね。

小林： この写真に写っている通訳は、皇太子の通訳を担当していた程日本語が堪能で、またサッカー経験者でもあります。

これが国立体育専門学校の学生です。カンボジアは2部制なので、体育の授業がほとんどありません。カンボジアの国が体育の行事を各学校に行き回って取り組んでいこうとしています。2年間全寮制で、プノンペン校の学生はほとんどいません。彼らは田舎に帰って、体育の授業をまず普及させるのではなく、体育の行事を普及させようという意識でやっています。国立なので設備は良いです。

小林先生の写真をプロジェクターに投影終了

小池： 今日貴重なお話しありがとうございました。週末子どもが通っていた小学校のサッカーのお父さんコーチをしています。スポーツを通じた豊かな暮らしの理念に共鳴し、3年ほど会員になっております。

海外での体育の普及は私の仕事と直接関係はありませんが、そもそもスポーツとは何か、人間教育の中でスポーツが持っている役割というところが、自分自身がサッカーを通じて子どもたちと接していて気になっているところです。

一つお伺いしたいのが、カンボジアで体育の授業や行事の普及活動をされていらっしゃるということなのですが、スポーツの成り立ちを考えてみるとそれぞれの地域でスポーツもどきのようなのが19世紀にある程度体系化されてきたという印象があったのですが、例えばカンボジアでは日本とか西洋で考えるスポーツではないけれども、お祭りみたいな行事として何か行われている催しはなかったのでしょうか。

山平： 私が運動会に取り組もうと思ったきっかけが、カンボジアに青年海外協力隊として2年間住んでいたときに、クメール正月（4月）で出会った遊びです。果物を吊して早く食べる競走をして

いて、パン食い競走と似ていると感じました。米袋に入って両足で跳んだり、カンボジアのお正月にそういった遊びをしていました。そこからヒントを得て、日本の運動会に共通する点がみられたので、カンボジア独自の文化も踏まえて、運動会を開催したのがきっかけです。

小池： なるほど、やはりそういうものがあるわけですね。ただ、学校の授業で2単位とはいっても行われていない、それも現実だということですね。

山平： はい、そうです。

小池： そうなると、ある青年海外協力隊の方の話ですが、体育をやると制服が汚れますよね。汚れたり擦り切れたりして帰ってくると、なんでそんなことするのかという保護者の反応があったそうですが、そのあたりどうですか。

山平： 私が青年海外協力隊として入っていた学校は、都市部でしたの体育授業に対して否定的な保護者は比較的少なかったと思います。ただ、運動会や他のイベントの開催通知をしても中々保護者が見に来てくれたりしませんでした。まだまだ保護者は「学校では読み書き計算をしっかり教えてもらって、よい就職をしてくれればいい」という考えである印象です。

小池： 体育ではない部分を一生懸命やってくれればいいという意識でしょうか。

山平： そうですね。そういう意識の保護者が多いと思います。見に来て下さる一部の保護者は楽しそうなことをやっているねという反応を示して下さる方もいらっしゃいます。

小池： よくわかりました。ありがとうございます。

遠山： ICUには体育の授業はあるのですが、こういう体育の座学・留学・派遣のプログラムがないので、国際武道大学で取り組まれているプログラムは、私自身にとってはすごく魅力的でした。

山平： 日本人がオーナーであるカンボジアのプロサッカーチーム・Cambodian Tiger FCがインターンなど募集されていたりしますので、調べてみると活動のチャンスもあるかと思います。

安藤(江)： 高校時代にシンガポールに留学したことがあり、カンボジアにボランティアをしに行ったことがあります。スポーツは苦手ですが、折り紙を孤児院の子どもたちに教えてすごくいい経験になりました。私にもできることがあるんだとつながる部分がありました。

今野： 私自身アンテナをたくさんはってみたいつもりです。改めてこの活動を知ることができて良かったと思います。私の率直な感想として、カンボジアで教員を志望している学生が多く驚きました。教員の需要は多いのでしょうか。

山平： 多いです。教員養成学校の学生はほぼ100%教員になります。

今野： そうした需要がある中で、体育の授業の内容がまた体操だけであったりということですよ。そうすると、教員養成学校で、私達がどういうふう支援していけるのか、支援していくのかという部分で可能性があるなと感じました。

徐々に国際武道大学の中でも教員を目指している学生の参加が増えているという変化をしていますよね。その変化に合わせて、スポーツ競技ではなく小学校を対象に対応されていますね。小学校・中学校の発達段階からしてもコーディネーション・トレーニングだったり、神経系をつかった運動の体育の方があっているかもしれないとは思っています。つまり、用具を使わない指導方法を工夫していくと、この活動にもっと幅が広がるのかなと感じました。

山平： 小学校において神経系を鍛えていく部分では、「36の動き」を軸にした運動を検討しています。かつ用具に頼ることなく、小学校でできる体育を検討しています。そうした指導ができる小学校の先生を目指して、昨年からは体育のプログラムや教材を、カンボジアに渡航する学生が作成しています。今野君が考えていることを、学生が実践しています。

今野： 物資の支援をしているということですが、物の管理はどうされているのですか。

山平： 直接児童や生徒に渡すと、物資の取り合いになります。それは支援の失敗事例だと思います。従って我々が支援する用具・道具は、休み時間にボールの貸し出しや、靴にしてもユニフォームなども、校長先生に説明をして学校で管理してもらうようにしています。

嶋崎： それでは、最後に山平さんまとめをお願いします。

山平： 本日は貴重なお時間を頂きありがとうございました。国際武道大学のこの活動は、2020年以降も続けていけるように続くようにしっかりやっていきますので、ご協力と応援をよろしくお願い致します。

以上（続きは「景宜軒」にて）